



(社)日本建築美術工芸協会

2009.4.

CONTENTS

aaqa 20周年に寄せて 祝辞

文化庁長官 青木 保	1
------------------	---

aaqa 20周年記念事業

●設立記念会

・あいさつ	2
・記念講演会「東京スカイツリーの計画とデザイン」	3
・第18回 AACAA賞・第7回 芦原義信賞	4

●交流講演会「日本橋再生計画」	7
-----------------------	---

●aacaフォーラム「皇室建築を造営した技師達」	7
--------------------------------	---

●記念セミナー「ひらめきを呼ぶ空間創り」	7
----------------------------	---

●交流講演会「中国~変わるものと変わらないもの 最新プロジェクトを通じて~」	7
--	---

●第2回 aaca十7展	8
--------------------	---

●aacaフォーラム「富岡製糸工場の建築」	9
-----------------------------	---

●建築視察旅行(長野周辺)	9
---------------------	---

●第7回 シナジー展	10
------------------	----

●記念シンポジウム

・「石見銀山が世界遺産になったわけ」	11
・「環境に生きる建築・美術・工芸」	12

●aaca建築と文化を語る夕べ

「都市と人と自然との共生まちづくりーなんばパークス」	14
----------------------------------	----

トピックス

●澄川喜一副会長 文化功労者	14
----------------------	----

アピアランス

・個人会員	15
-------------	----

・法人会員	17
-------------	----

記念事業参加者 ご芳名	21
-------------------	----

新入会員・会員の移動・その他	21
----------------------	----



祝 辞

文化庁長官 青木 保

このたび、社団法人日本建築美術工芸協会が創立20周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

社団法人日本建築美術工芸協会は、昭和63年に、「建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携と協力により、建築に係る芸術的環境の創造と保存を図り、我が国文化の向上発展に寄与する」ことを目的に、設立されました。

この20年間、社団法人日本建築美術工芸協会は、協会賞をはじめとして、aaca景観シンポジウムや建築に関する芸術的環境の創造・保存の質的向上を図る講演会や研修会等の開催を通じて、我が国建築美術の発展に大きく貢献してこられました。その永年にわたる御功績は大変意義深く、関係者の皆様の御尽力に深く敬意を表する次第です。

文化芸術の振興は、心豊かで活力ある社会を創造するために必要不可欠なものであります。人々が今後とも豊かな生活をおくることができますよう、社団法人日本建築美術工芸協会の皆様には、建築・美術・工芸を通して我が国文化芸術の振興のために引き続き御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

おわりに、社団法人日本建築美術工芸協会の今後ますますの御発展と関係者の皆様の御健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

設立記念会

記念講演会

「東京スカイツリーの 計画とデザイン」

開催日：2008年12月3日（水）

会場：建築会館ホール

主催：(社)日本建築美術工芸協会

来賓

青木 保氏 文化庁長官

代読/野口 玲一氏 文化庁文化庁芸術文化課調査官

斎藤 公男氏 (社)日本建築学会会長

特別講演会講師

中村 光男氏 (株)日建設計代表取締役会長

宮杉 欣也氏 東武タワースカイツリー(株)代表取締役社長

澄川 喜一氏 彫刻家

コーディネーター

芦原 太郎氏 建築家 芦原太郎建築事務所代表



あいさつ

中島会長 当協会の会員は多くの業種の方々であり、それぞれの委員会を中心に会の協力のもと、20周年記念事業を意欲的に進めてまいりました。

20周年の今期といたしましては道なかばではありますが、今後も意欲的な記念事業が計画されておりますので、会員の益々の結束力を発揮していただき20周年の意義ある結果を残し、魅力のある協会として更なる発展を皆様と共に期待したいと思っております。

野口氏 この20年間、社団法人日本建築美術工芸協会は協会賞をはじめとしてaaqa景観シンポジウムや建築に関する芸術的環境の創造、保存の質的向上を図る講演会や研修会の開催を通じて、我が国建築技術の発展に大きく貢献してこられました。その長年にわたるご功績は大変意義深く、関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表する次第です。



中島会長



野口氏

文化芸術の進行は心豊かで活力ある社会を創造するために必要不可欠なものであります。人々が今後とも豊かな生活を送ることができますよう、社団法人日本建築美術工芸協会の皆様には建築、美術、工芸を通して、我が国文化・芸術の振興のために引き続きご尽力を賜りますよう、お願い申し上げます。

斎藤氏 本日は日本建築美術工芸協会20周年ということで大変おめでとうございます。本日、先ほど記念の冊子を拝見しましたら、実に多様な、非常に長年にわたる活発な活動、本当に心より感動いたしました。歴代の会長はじめ役員、そして会員の皆様方のこれまでのご苦勞に対して心より敬意を表したいと思います。



斎藤氏

まずは会長として一言御礼申し上げたいことがございます。この学会中庭、あるいは建築博物館がございまして、こういうところに年に何回か当協会の皆さんの大変魅力的な創作の作品が展示されます。学会という大変堅苦しい中に芸術にあふれる作品が並ぶということは、市民に対しても大変すばらしい空間をつくっていただいていると感謝しています。

記念講演会

芦原氏 タワーが2011年に東京にできることについて、ご関係の皆様からお話をお聞きしながら、いったいどのようになるのか、明るい未来は来るのか皆さんとお話できればと思っております。

中村氏 このスカイツリーはすでに着工しております、工事の完成は2011年のちょうど今頃。あと丸3年になります。今回のスカイツリーは高さが610メートル。単独のタワーとしては竣工時点では世界一の高さになる予定です。場所は、東武鉄道さんの業平橋の駅の隣接地です。今回のタワーの特徴をまとめてみますと、一つの単純な平面形と言いましょか、円なら円、四角から四角で、足元から610メートルまでずっと同じ形で建てるのではなく、二つの形が互いに相関するように610メートルの中に変化をつくれなにかというところがそもそものスタートです。



中村氏

澄川先生にご参加いただいて検討していく中で、日本的な美の感性を持ったタワーにできないかということで、「反り」と「むくり」というような造形的な要素を取り込んできたということ。もう一つは足元をできるだけ開放的にということ。結果的には大きく3本の足で持つ形ということで3方向に開かれたゲートを持つデザインになっています。

東京の空に新たな景観を描く新タワー。未来へと希望をつなぐ斬新なデザインです。中のエレベーターを取り囲む3本の足がタワーをしっかりと支えます。タワーの足元の断面は三角形。それが頂上に向うにつれ円へと移り変わり、タワーを形づくるラインが連続的に変化します。そのデザインには日本の伝統美が盛り込まれています。

耐震構造にも日本古来の知恵が活かされています。五重塔は中心を貫く心柱と各層が異なる動きをすることで揺れを抑えたと考えられています。この仕組みを現代的に解釈し最先端の耐震構造を実現しました。

澄川氏 まず狭い敷地で高いものをつくらうというのだからシンプル・イズ・ビューティフルが一番いいんじゃないかと。過剰な装飾はないほうがいいし、日本の技術で日本の伝統ある、世界に誇れる五重塔が非常にきれいですから、そういう形態を想像しながら形を求めれば、最も日本的なものとして世界に誇れるのではないかとということからスタートしました。



澄川氏

僕は今度できるものは人体のような気がするんです。そういうことの上で新しい技術を入れれば、外見はシンプル・イズ・



ビューティフルで日本の五重塔もイメージされるのではないかと。外国のまねではない、考えも日本、方法も日本、材料も日本、そういうのが一番いいんじゃないかと思っています。

宮杉氏 私ども、このプロジェクトをライジング・イースト・プロジェクトと申しまして、日本の東、東京の東から新しい光が輝いてくるという意味でこの敷地は約3.7ヘクタールございまして、その中にタワーが建つと同時に、足元に街が開けて、タワーが約610メートル。一方のオフィスタワーがだい



宮杉氏

たい150メートル、32階建を予定しています。総延べ床面積約23万平方メートルです。今まで東京の西あるいは南のほうに新しい再開発のビルとかプロジェクトがどんどん進行してまいりまして、かつて上野・浅草・向島といったところが賑やかな街でしたが、どうも都市軸が西へ、南へ行っている。これをなんとか東のほう、城東地区にまた戻したい。街としての復権をしたいという思いもございまして、トータルでタワーのお客様、それからそれに合った街づくりのお客様。これをもってこの地域をまた活性化したいという願いを持っていま計画を進めているところです。

芦原氏 骨組みがあっけきちと立っていると。とにかくすごい大きさ。まだ分からないわけですけど、実際にできたらものすごい大きさですよ。それはやっぱり東京の景観に確かにものすごいインパクトがあると思います。東京タワーもできたときは、なんだあれはみたいな感じであまり評判がよく



芦原氏

なかったですね。50年前にできたときは、パリのエッフェル塔より背が高い世界一という時代が確かにあったんだけど、何かなという感じだった。僕も東京で生まれて東京タワーにずっと上らないで、ついこの前、大人になって外人を連れて行くときに初めて上ったのですが、そんなタワーもずっと都市の中に何十年も存在しているうちに、だんだん存在感を持ってきて。

ぜひすばらしいタワーをつくって、次の時代の僕たちの新しい東京の顔ができますことをお祈りしたいと思います。

どうも今日はありがとうございました。

設立記念会

選考委員長

澄川 喜一

選考委員

岡本 賢

加藤 貞雄

村井 修

小倉 善明

藤江 和子

近田 玲子

ゲスト選考委員

芦原 太郎

川上 喜三郎



AACA賞トロフィー
作:澄川喜一



第18回 AACAA賞・第7回芦原義信賞

総 評

選考委員長 澄川 喜一

日本建築美術工芸協会が創立して今年20周年を迎える事になり、このAACAA賞も18回を数える事となった。この記念すべき年に応募作品数も大幅に増加し、AACAA賞は26作品、芦原義信賞が25作品、合計で51作品の応募があった。建築美術工芸協会の趣旨も年々社会に浸透して、それにふさわしい高いレベルの作品が揃っていた。応募パネルと提出資料によって第1次審査が行われ、各審査員間の厳しい議論の中から、現地審査対象作品としてAACAA賞8作品、芦原義信賞5作品、計13作品が選ばれ、その中10作品については2名以上の審査員が分担して現地審査を行い、他の3作品については各審査員が適宜現地審査を行う方法をとった。現地審査ではクライアント、設計者、施工者等から入念な説明を受け、各々濃密な空間を体験する時間を過した。現地審査後第2回の審査会を開催し、各々現地を訪れた審査員が作品の説明、評価を行い、他の審査員からの質問や感想が述べられ、激論がたたかわされた。その中からAACAA賞本賞として、審査員から圧倒的に評価の高かった「金刀比羅宮プロジェクト」が選ばれた。金刀比羅宮に既存する伝統様式の中に現代的建築デザイン手法を取り入れ、鉄板や石の素材感を強く感じさせる空間構成に感動させられた。また、近年完成したレストラン棟の壁画と一体となった計画も素晴らしく、全体として高く評価された。また、永い年月をかけてアートと一体となった、素晴らしい都市景観を形成した「丸の内仲通り」を特別賞に選定した。「グラ

ンドプラザ」は、都市再開発の中に様々なイベントを可能にする装置を備えた空間を創出し、町の賑わいの中心となり、地域の再生に寄与する情景が高く評価され、また、「大阪弁護士会館」は緻密に計画された建築手法によって生まれた、洗練された空間が高く評価され、各々奨励賞に決定した。

芦原義信賞は「隙屋」が選ばれた。浜名湖を見晴らす素晴らしい景観を最大限に生かし、自然と一体となり、自然をコントロールしながら行う生活イメージが、審査員の高い共感を呼んだ。また「学校法人摺河学園ハーベスト医療福祉専門学校」は、厳しいローコストの中で様々な工夫をこらした設計手法によって、若々しいさわやかな表情を都市に与えた事を評価し、また「神保町シアタービル」は厳しい敷地環境、法規制を逆手にとってユニークな形態の建築を創造した新鮮な姿勢が、新人賞という性格を持つ芦原義信賞にふさわしいと評価され奨励賞に決定した。

建築と美術と工芸とさらにランドスケープが一体となる事によって、素晴らしい環境創造がなされ、私達の日々の生活がより豊かになる為に様々な分野の芸術家が共同して、各地で良質な空間が増え続けている事が実感でき、この賞を審査できる事の喜びを強く感じた。応募された多くの高いレベルの作品を創造していた方々に敬意を捧げると共に、今後の一層の活躍を祈りたい。賞の為に様々に協力頂いた応募関係者の方々に感謝し、この協会の発展に力を貸して頂ける様お願いして審査総評とする。

第18回 AACAA賞

■金比羅宮プロジェクト

作者：株式会社鈴木了二建築計画事務所<設計>
+清水建設株式会社<施工>

■審査講評

金刀比羅宮プロジェクトは、複雑で急峻な起伏のある象頭山の手つかずの広葉樹林に存在する既存の本宮をはじめとする歴史的建造物の中に新しく増築された2棟の建築、授与所棟及び参集所を含む齋館棟である。敷地は背面も前面も急峻な崖地であり、わずかな平地には、すでに本宮をはじめ数々の木造古建築群で占められている。新しい2つの建築は既存建築群に沿ってわずかに残された場所に中庭を挟んで造られているが、既存建築に劣らぬ迫力と優美さを兼ね備える。

圧巻はこの2つの建築の接地性にある。本宮に向けて階段を上り詰めるにしたがって現れる無垢の御影石が隙間なく垂直に立つ擁壁と、厚みが12~24ミリの鋼板フラットスラブと壁柱が作りなす人工大地の上に作られた檜皮葺きの入母屋造りの参集所はあくまで優雅である。一方、中庭を隔てて山腹に半ば埋まるように作られている齋館棟は本瓦



葺きの切妻造りの屋根が力強いが、この建築も鋼板柱と鋼板フラットスラブに支えられている。随所に見られる鋼板は時と共に茶色の鉄錆を見せており、これが大地の一部になっているかのような表情である。大胆で端正なディテールが建築を支配している。部分が全体であると同時に全体が部分である新しい建築と、それが加わることによって造られた環境は、世紀を超えた建築の芸術性を見せてくれる。AACAA賞にふさわしい建築である。

小倉善明



特別賞

■丸の内仲通り

作者：株式会社三菱地所設計 取締役社長 小田川和男

■審査講評

丸の内仲通りは著しく変貌した。さらに、エリアは南に延びようとしている。道路両側に、超高層も含むビル群が立ち並ぶこの道路が、大都会東京ならではの都市空間として整備されているのである。そして、かつてなかった景観が生まれた。ここは、東京にはじめて生まれた、快適で秩序のある、大規模なパブリック・スペースといえるだろう。

従来より歩道を広げ、その歩道と車道に同じ自然石を方形に敷きつめたことで、心地よい統一感が生じ、しかも暖か味が通う。また、それぞれに個性のある建物のファサードを違和感なく包み込んで一体化している。街路樹もケヤキやシナノキなどの混植とし、ベンチなどのストリート・ファニチャー類もデザインを揃えて、季節ごとに21メートル幅の”歩い



て憩える”空間の創出に成功したように思える。

仲通りの建物側に一切看板類などないことも美観作りへの参加意識の高まりと、行政とビル側との協調が進められた成果であることを強く感じさせる。そうした、地域が参画するパブリック・スペースであるなら、もうひとつががんばって、設置するアートについて、地域の関心をそそる工夫もあっていいのではなかろうか。折角の見事な都市空間だし、そこから発信されるものの広がりは大いなのだ。

加藤 貞雄



奨励賞

■大阪弁護士会館

作者：
株式会社日建設計 江副敏史

■グランドプラザ

作者：
株式会社日本設計 浅石 優



設立記念会

第7回 芦原義信賞

■ 隙間だらけの納屋

作者：鈴木 幸治



芦原義信賞トロフィー
作：川上喜三郎



すぐれた建築に出会うと余韻嫋々として情感が充たされる。棲み方にこだわりのあるクライアントと、クライアントのイメージを技術的、資金的な回答を誠実に模索、具体化する建築家とのコラボレーションが実って、自然により近い生活、作業、開いた接客の場が生まれた。永年積み重ねられた知恵によって引き継がれるシンプルな形態とスケールの「納屋」をテーマに、エコを意識した離瓦の屋根、唐突とも見えるRCの風と潮騒の通り道は、その地形に馴染んでいる。ポリカーボネートの外皮は光に反射して金属の様相をも見せるし、近くでは内皮が木のスリット横張りだと解る。9尺グリッド、5寸角柱2層軸組みの伽藍空間には、光と影によって醸

成される旨い空気が広がる。遠景、近景は印象を変え、太陽、月に刻々と感応するこの納屋の姿、隙間空間は、自然の恵みのカタリスト、触媒である。前庭のアウトスケール、ガラスの細長いテーブルは浜名湖を正面に見渡す。実は土台が斜面の土留めの役割をしていると伺った。料理達人なクライアントがこのテーブルでゲストをもてなすらしい。

私事ですが、京都迎賓館（設計：日建設計）の、あかり行灯計画に携わり「光を囲み 影を織る」という私のテーマに響く作品を拝見し、今回夜景を鑑賞する機会は無かったが、その美しい姿を想像するのはそう難しい事ではない。

川上 喜三郎

奨励賞

■ 学校法人摺河学園ハーベスト医療福祉専門学校

作者：岩田 章吾



■ 神保町シアタービル

作者：株式会社日建設計 山梨知彦 + 羽鳥達也



交流講演会 「日本橋再生計画」

開催日: 2008年7月15日(火)
会 場: 三井不動産・別館
主 催: (社)日本建築美術工芸協会
講 師: 中川 俊広氏(三井不動産(株) 日本橋街づくり推進部長)

古くより江戸の中心地として栄え、歴史的建造物も多くある日本橋の景観を重視した街づくり、海外からの来訪者が訪れたい文化・商業・文教の三位一体の街づくり、日本橋川の再生に伴う首都高速道路の地下への移設や、風の流れをも考慮した街づくりなど、今後20年、30年という長い年月をかけて行われる再生計画についての中川氏のお話は、実に興味深く、且つ聴衆が引き込まれる内容で、講演時間の90分は瞬く間に過ぎた感があった。



aacaフォーラム 「皇室建築を造営した技師達」

開催日: 2008年7月25日(金)
会 場: アトリエ・ユニオン
主 催: (社)日本建築美術工芸協会
講 師: 浅羽 英男氏(建築史家)

浅羽英男氏〔建築史家(皇室建築史)〕は、旧建設省、宮内庁ご在職中から皇室建築に関連した実務・研究に就かれ、「皇室建築～内匠寮の人と作品～」の発刊に著者代表〔監修/鈴木博之東京大学教授 発行:建築画報社〕として関わられ、又、日本テレビ系『皇室日記』にもたびたび出演されるなど馴染み深い方でもあります。

浅羽氏には過去のフォーラム(第165回)において「皇室建築の紹介～明治から昭和初期の作品を中心に～」と題してご講演賜っておりますが、今回は皇室建築に関わった人物そのものにスポットを当て、日本の建築史の一面を浮かび上がらせた興味ある内容のお話となりました。

記念セミナー 「ひらめきを呼ぶ空間創り」

開催日: 2008年9月22日(月)
会 場: 大成建設 プレゼンテーションルーム
主 催: (社)日本建築美術工芸協会
講 師: 可見 才介氏(大成建設(株))

交流講演会 「中国～変わるものと変わらないもの 最新プロジェクトを通じて～」

開催日: 2008年9月26日(金)
会 場: コトブキ・DIセンター
主 催: (社)日本建築美術工芸協会
講 師: 大野 勝氏((株)佐藤総合計画)

株式会社佐藤総合計画 取締役専務執行役員であり、aaca理事でもある大野 勝氏を講師に向かえ、「中国」～変わるものと変わらないもの 最新プロジェクトを通じて～と題して、第20回交流講演会が行われた。

北京オリンピックを終え2010年には万博開催と、急速な近代化と国際社会への台頭を目指し、大きく変貌を遂げる中国、一国二制度という2つの顔を持つ中国は、今まさに世界経済のみならず強い影響力を持つ大国として多くの注目を集めているところでもある。

今回の講演は、建築プロジェクトという側面から長年にわたり国際コンペに参加、入選を果たしてきた同氏の経験と知見をご披露して頂き、100名を超える聴衆も国際化する建築設計の動向の一端に触れることができたと同時に中国が頑なに守る精神性と文化を垣間見る貴重なひとときとなった。



第2回 aaca+7展

開催日:2008年9月15日~23日

会場:建築会館1階・建築博物館 中庭

主催:(社)日本建築美術工芸協会

aaca20周年を記念して、はばたくをテーマとする。
同協会の更なる発展とこの展覧会の地域への浸透を願う。



高濱英俊 (彫刻家)



庄 漫 (版画家)

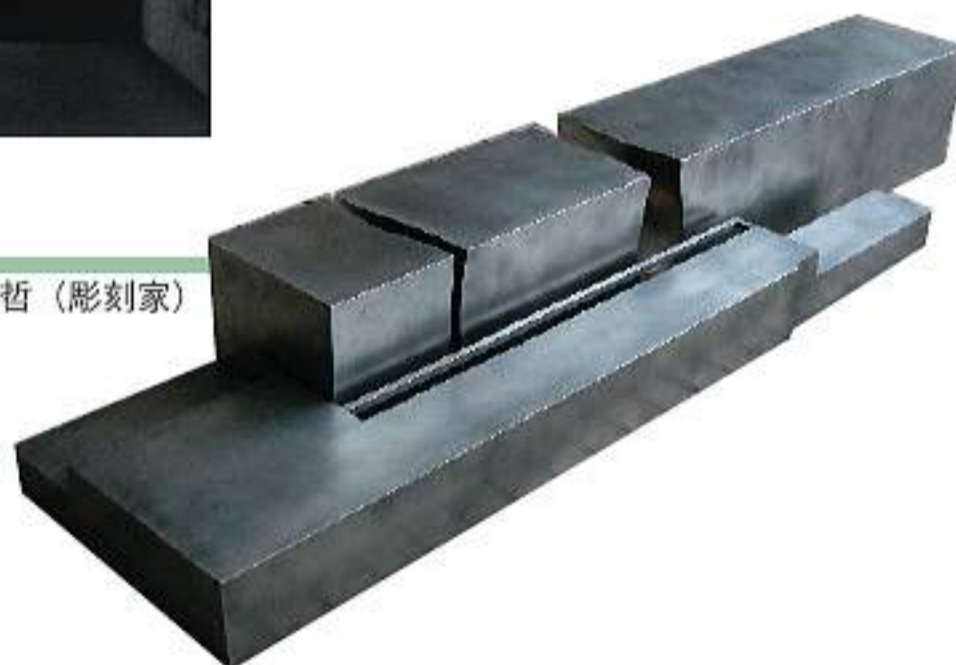


服部睦美 (鍛金家)



神代良明 (ガラス作家)

岡村光哲 (彫刻家)



波邊早苗 (画家)



井上 剛 (ガラス作家)



aacaフォーラム 「富岡製糸工場の建築」

開催日:2008年10月22日(水)
会 場:アトリエユニオン東京ショールーム
主 催:(社)日本建築美術工芸協会
講 師:清水 慶一氏(工学博士・一級建築士)

世界遺産の中の産業遺産について解説いただき、特にイギリスでの産業世界遺産の事例を中心として保存・活用の基本的な考え方、地域の整備と地域の振興との関連について。

また日本の産業遺産として世界遺産暫定リストに登録された群馬県の「富岡製糸工場と絹産業遺産群」についてその保存と活用及び地域振興の方法などのお話をいただきました。



- ・世界遺産の現状
- ・南ウェールズ・ブレナボン
- ・日本の近代の産業遺産
- ・近代化遺産の実例:産業
- ・富岡製糸工場と絹産業遺産群
- ・地域整備 世界遺産ブレナボン産業
- ・世界遺産の現状
- ・産業世界遺産
- ・ヨーロッパ産業遺産の道
- ・ダーベント溪谷綿紡績工場群
- ・都市型の産業遺産
- ・ビッグピット
- ・地域の道の実例
- ・富岡製糸工場と絹関連遺産群
- ・日本の産業世界遺産

建築視察旅行（長野周辺）

開催日:2008年10月31日～11月1日

第三回建物視察会は2008年10月31日～11月1日にかけて総勢25名で長野地区の建物を巡る有意義な視察会となりました。

初日は、「中村キースヘリング美術館」「茅野市民会館」「エプソンイノベーションセンター」から「まつもと市民芸術館」と廻りました。エプソンイノベーションセンターでは、日建設計の五十君(いそぎみ)様に特別に

ご案内を頂き普段では入れない様な場所の見学や、貴重なお話しも伺いました。

二日目は、「旧開智学校校舎」「まつもと民芸家具」から軽井沢に向かい「石の教会」「軽井沢大賀ホール」と廻りました。各施設では、非常に興味深く建物の写真を撮ったり熱心に説明を聞く方々が多く大変充実した2日間となりました。

スケジュール的には少し厳しいところもありましたが、最終的には予定より少し早く終了することができました。



第7回 シナジー展

開催日:2008年11月3日~16日
 会場:建築会館1階・建築博物館 中庭
 主催:(社)日本建築美術工芸協会

シナジー展は7回展から11月開催に変更になり、文化の日の晴れて暖かい日に催されました。祝日だったので、オープニングは勤めている方は少なく、理事の方もほとんどいませんでした。代わりに例年参加できないでいたような方々が来て下さり、列席者の人数は昨年以上にいた気がしました。しかし、今後のパーティーは平日に開催するように、初日にこだわらない方針に転換します。

今回の大きな変化は法人出展として伊奈製陶さんが協力してくれた事です。社員で韓国人の崔氏の出展を応じて頂き支援してくれました。崔氏はイナックスの社員でいながら造形家として研鑽し各地で受賞歴があります。協賛企業としてただ名前を列ねるだけでなく、積極的に展覧会に参加して頂くのは以前から求めていたものであり、この例は理想的な形として続けていって欲しいと思います。

メンバーの課題制作として、今年もパネル展示をしました。ちょうどメンバーの平山さんが横浜市開港記念会館のステンドグラスの修復をされていたのに合わせて、他のメンバーも仮想のアート計画を試みてみました。まるで本当に企画されたかのような見事な仮想空間が出来上がりました。平山さんの修復の紹介とあわせて展示できたのが良かったと思います。次回はどうか、まず候補の建物の選定が難しいです。メンバーも今回も意欲的な作品を展示して頂きました。各自の持ち場に合わせた個性的な作品を次回も準備してくれる事でしょう。

グループ展も回が重なると惰性的になりがちですが、今

後も意欲的なメンバーを募り変化発展していかなばなりません。協会の秋の展示会としてメンバーが入れ代わっても続けていける構造を作る時期にきています。個人の誠意だけに依存した運営ではいろいろと無理がきます。建築会館の会場の素晴らしさをもっと宣伝し、田町を新しいアートのスポットとして認知される日が来るのを期待します。

この文を借りて今回も関係者の皆さんに御迷惑をかけお世話になった事をお詫びいたします。

aacaシナジー展幹事 三木 勝



記念シンポジウム

「石見銀山が世界遺産になったわけ」 ～自然と共に暮らしてきた産業遺産～

開催日:2008年11月13日(木)

会場:丸の内MY PLAZAホール(明治安田生命ビル4階)

主催:(社)日本建築美術工芸協会

来賓 溝口 善兵衛氏 島根県知事

特別講演会講師 清水 慶一氏 国立科学博物館参事

大國 晴雄氏 島根県大田市教育委員会教育部長

北田 英治氏 写真家

コーディネーター 澄川 喜一氏 彫刻家・島根県芸術文化センター長・aaca副会長

パネリスト 渡部 孝幸氏 町並みアドバイザー

大森町のみなさん/中村 仁美さん 中村プレイス社長夫人/向野 美保さん いも娘



aaca設立20周年記念事業の記念シンポジウムとして、「石見銀山が世界遺産になったわけ～自然とともに暮らしてきた産業遺産～」が、開催されました。



溝口氏

溝口氏 石見銀山は今年の7月、ニュージーランドのクライストチャーチで行われました世界遺産委員会において登録をされたわけでございます。日本で登録された14番目の遺産になります。遺産には自然の景観あるいは文化、いろいろありますが、石見銀山は鉱山遺跡としてアジアで初めて世界遺産に登録をされたわけでございます。石見銀山の遺跡は、銀の採掘、精錬、それからできたものを街道を通じて瀬戸内海、あるいは日本海側に出て、大阪まで行く。それを海外に輸出をするということでございます。港町があり、街道もあるわけでございます。それから精錬をする人々の住む場所がある。それを管理する、江戸時代でございますから代官をヘッドとした官僚の組織、役人の組織が経営体としてあった。そういう複合的な資産でございます。この機会に石見銀山の価値をお勉強していただき、また地域の方々にもお話をいただきまして、また島根の石見銀山まで是非ともおいでくださいますようお願い申し上げまして、地元の知事としてのご挨拶といたします。



清水氏

清水氏 産業遺産とは何か。産業遺産というのは人の生業、あるいは営みの跡と想っている。およそ人がずっと住んできた場所というのは、そこでの営みとか生業の跡が必ずある。それが地域というものの独自性を形成している。そして、それを目に見える形で次の世代に伝えていくのが産業遺産の活用であると考えている。

現在、石見銀山協働会議がまとめた石見銀山行動計画なるものが策定されている。

今回、暫定リストに佐渡銀山が追加され、それが石見銀山と接点のようになっているが、今の私の文脈から言うとこれはいかがなものかと思う。先進国では世界遺産を利用した地域整備、振興が行われている。学術的には確かに廃坑というものの絡みがあるだろう。しかし地域の人の営みや生業を残して地域を整備していく、あるいは次世代にその地域のアイデンティティを伝えていくという発想からすると、佐渡と石見を一体化して考えることができるのかどうか考えてほしい。

大國氏 石見銀山遺跡は1500年代に開発された銀の鉱山遺跡である。鉱山は地下資源なので、掘り出し始めてから必ず終わりが来て、



大國氏

一般的には遺跡になる。石見銀山遺跡は1923年(大正12年)に操業を終わり、産業革命の影響はほとんど受けなかった前近代の産業の遺跡・遺産ということで世界遺産になった。一方で、石見銀山遺跡は50年前から地域の住民が大切にし、その遺跡と共生してきた。自然に

溶け込んでいるが、銀を掘った人々の営みが残っており、地面の下を発掘調査すると前近代の遺跡が次々に見つかる。石見銀山遺跡の世界遺産となった範囲は生産から流通の前半まですべてを含み、それが非常によい状態で残っている。自然の中に溶け込み、その自然と歴史の間には人々が暮らしていて、遺跡・自然と共生している石見銀山というのが、今回の大きな世界遺産としての価値だろう。日本もかつては地下資源国であった。この地下資源と人類のかかわりの中で石見銀山遺跡は、特にアジアの中の鉱山遺跡として高い価値を示している。自然との共生ということで、環境にいかにか負荷をかけないか、いかに影響を小さくするかということについてさまざまに考え工夫した。遺跡の名前が有名であることとヨーロッパの地図に書かれていたことで世界遺産になるというわけではない。遺跡、現地がいかによく残り保存されているかということで、世界遺産になることの必然性がある。

石見銀山遺跡は脆弱な遺産であり、世界遺産に登録して保存し未来に引き継ぐ必要がある。また、地味な遺産だが奥が深く、住民と遺跡と自然が共生する遺産であることで、世界遺産として登録された。

この後、世界遺産のモデルとして、石見銀山遺跡を未来に引き継いでいく必要がある。値段はさほど高くないが、今よりははるかに高かったという銀が多量に採れた鉱山の遺跡がよく残り、その遺跡の中で今も住民が暮らし続けている。これが石見銀山遺跡が世界遺産になったわけの公式版である。



記念シンポジウム 「環境に生きる建築・美術・工芸」

開催日:2009年2月4日(水)

会場:東京ガス 浜松町本社ビル

主催:(社)日本建築美術工芸協会

パネリスト

岩井 光男氏

(株)三菱地所設計 代表取締役副社長

大野 勝氏

(株)佐藤総合計画 取締役専務執行役員

岡本 慶一氏

(株)日建設計 代表取締役社長

岡本 賢氏

(株)久米設計 代表取締役会長

佐野 吉彦氏

(株)安井建築設計事務所 代表取締役社長

六鹿 正治氏

(株)日本設計 代表取締役社長

コーディネーター

馬場 璋造氏

建築評論家 (株)建築情報システム研究所代表



馬場氏 今日のテーマ、環境の中での建築・美術・工芸のあり方が、これからどうあったらいいかというあたりを一言ずつ、どういうふうにお考えになっているかお話をお伺いしていきたいと思えます。



岩井氏 丸の内といわゆるネットワークという話があったと思うのですが、これからの我々建築設計者というのは個々の自分のエリアだけのことを考えているといいものはできないし、今回のこういう経済的なクライシスの中でやはり失敗している人たちというのは一辺倒に何かをやっている。経済的にはアメリカに頼っているわけですが、自動車産業とか、そういうのがだめになるとその下請けがだめになってしまう。

都市というのは非常に多様性を含んでいて、多様性ということがおもしろさを都市に与えているわけであって、モノを作る時にそこら辺の都市のおもしろさというものをうまく組み合わせる。それは今、ネット社会と言われてはいますが、こういう社会の中で、うまくアートなり環境なりをつなげていくということが、我々の職能として一番、大事なことではないかと今、思っています。

丸ビルをやる時に感じたのは、丸の内というのはそれまで業務に特化された機能的な町でした。これはある時期になると、あそこはつまらない街だというような評価、生活しにくいという評価になってくるのですけれども、丸ビルをやるにあたって、それをなくそうということでアートを導入したわけです。その時に選定の基準となったのは時代をつかむと言いますか、環境のことをよく考えているアーティスト、それから人々のインタラクティブな交流とか、そういうものを考えているアーティスト。やはり先ほどのお話にもあったように、どこかのスペースにぽこっと置くアーティストではなくて、もっと環境を考えた美術、アートを考えている人たちと、我々としては一緒にコラボレートしたいということがありました。



大野氏 今までのお話にありましたように、本来、歴史的に見ますと建築と美術、工芸というのは、ある意味で分離するというよりはむしろ一体的だというふうに理解していいのではないかと思います。特に彫刻と建築の関係、あるいはアートと建築の関係をみると明らかではないかと思えます。それが究極的な形になると、きっと装飾という問題にもなるのかなというふうに感じているのですが、そういうものが分離されてきたというのは、モダン建築とか、あるいは時代的にもこの100年ぐらいだと思います。

そういうことを考えてみると、美術館とかホールというのもこの100年、200年ぐらいの世界であって、昔はそういう分離もなくして一体的なものであるというふうに感じているわけです。私が先ほど話したバナキュラー建築というのもそうなのですが、そういうものがモダン建築、あるいは美術との関係において有効ならば、今言ったそういう関係性というのは改めて見直す必要があるかというふうに思います。そういう意味で一時、はやったポストモダンみたいな時代には当然、戻れないと思うのですが、建築とアート、あるいは美術との関係というのは、私が個人的に思うのは、いわゆる緊張感を持った関係であるべきではないかと思うのです。

すなわちそれぞれが主張はするけれども、その主張の中で調和するという、あるいは一体化するということが必要ではないかと思うのです。美術のための建築、あるいは建築のための美術というような従属的な関係というのは、どうなのかなというふうに思います。そういう意味で、緊張感のある関係の中でそれが結果的に一体となるような、そういう建築と美術の関係が生まれるといいなというふうに思っております。

岡本慶一氏 今まさに100年に一度の危機と言われている時代に我々は突入しているわけで、だれにとっても未体験ゾーンに入ったというような認識を持っているのですが、これ



からどういう時代になるのかというあたりが私には大変、興味があります。どういう時代になるかという時に、私は建築であり美術であり工芸であり、そういったものの力みたいなのが、ある意味では非常に重要な時代になってくる。21世紀は環境の世紀とも言いますし、心の世紀とも言われているわけで、中にはクリントンさんのスマートパワーの時代であるというような話もありますし、それ以前にはソフトパワーという話もありましたけれども、ある意味で建築も含めたそういったナレッジと言いますか、堺屋太一さん流に言えば明らかに地下社会に突入した節目の年に昨年から今年はなったのではないか。そういう意味でこれからの日本の進路というか、どう生き方をしていくかという時に、あまりにも日本の伝統的な技能であるとか工芸であるとか、美術も含めまして日本のナレッジというか知というものが、おろそかにされ過ぎてきたのではないか。



岡本賢氏 この空間を例にとってみて、壁の材料は何を使うか、壁にどういうデザインが施されるか、天井にどういうパターンが作られるか、それによってこの空間の質は全く変わってくるというようなことがありますし、それが上質な空間になるか、あまりおもしろくない空間になるかというのは、そこにさまざまな芸術家なり、クラフターなり、建築家なりがかかわって、そういう空間を構成していくわけです。ですからお金をかければいいものができるというようなものを超越したようなところで、必ずそういうものが必要になってくるのではないか。

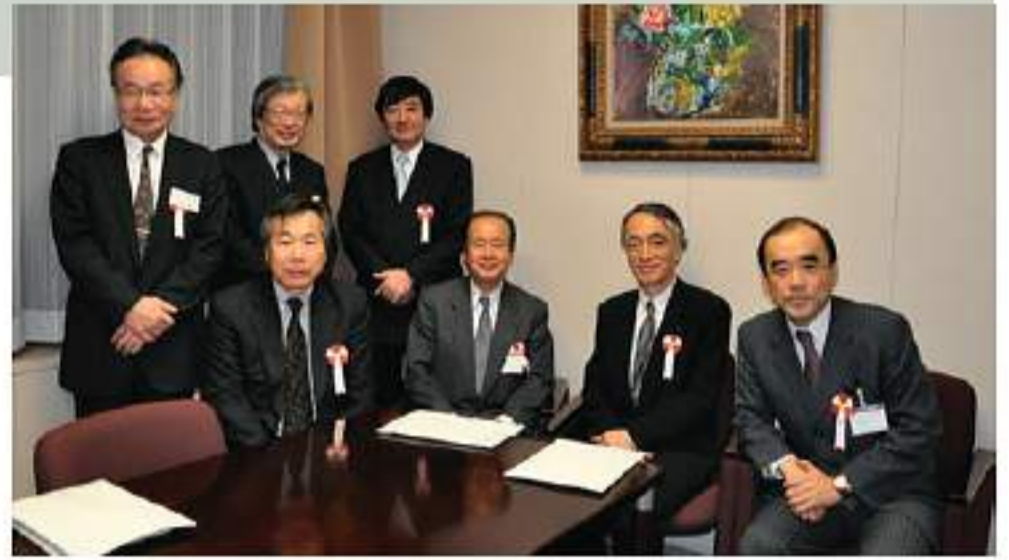
要するにここにあります建築・美術・工芸というのがそれぞれ独立したものではなくて、それが総体として建築空間を作っていくものというようなところが必要なのではないかと思えますし、日本は結構、伝統的に生活芸術的な、生活に必要なものを芸術に育てるというようなところが非常に強い、世界の中での特殊性があるのではないかと思います。



佐野氏 日本建築美術工芸協会というのは団体として非常に楽しいというか、参加しがいのある会だと思っているのですが、それは今のお話と逆の意味で、建築と美術と工芸というのはぜんぜん違う職能で、おそらく考えていることの出発点はだいぶ違うはずなのです。

だけど人間同士、個別に付き合ってみると非常に気持ちが通じ合ったり、この人と付き合うと自分が刺激を受けるとか、一緒に仕事をしたいとかという関係があって、コラボレーションみたいなことが始まらなければいけないというふうに思っています。

調和を目指すというのが我々、建築家の職能ではあるのですが、本当は調和せずにお互いが好き勝手なことを言いながら、刺激をし合っている形でできあがるというのが実は



社会にとっては、そのほうがいいものできたというふうに思ってもらえるのではないかと思います。先ほどメッセージという話をしましたけれども、そう言いながら結局、自分が本当にやりたいこととか目指したことは、実はあまり正確に伝わっていないような気がするのです。それぞれがやっていること、アートのほうも、工芸のほうも。でも伝わらなくてもいいのではないか。つまり半分ぐらい伝わって、あとは使う側が勝手に自由に解釈して、とんでもない解釈をしたけれども、できあがったものを気に入って、そこで都市がにぎわいをかもし出すようなことになれば、これは十分、成功だというふうに私は思うのです。



六鹿氏 建築に本当にアートとか工芸が必要かという問いを投げかけると分かつと思うのです。非常に突き詰めていって、すべてはがしていった機能だけということになれば、必要ないという答えが出てくるのです。だけどそれでは人間の文化ではない。そうするとあえて若干、お金がかかったり、あるいはプロセスが複雑になっても、ただ建築家が壁の材料、天井の材料、床の材料を考えるだけではなくて、そこでクラフトをやる人とかアーティストとコラボレーションしていこうというのは、やはり空間により豊かさを与える。その豊かさというのは何かというと、まさに今佐野さんが言ったように、どう解釈したっていいじゃないかというその辺のいい加減さ、あいまいさがいいのです。つまり見る人によって意味が違ってくる。それがいいのです。

すなわち単なる機能的な空間だったら、多分、意味は一つなのです。それにアートが加わり、クラフトが加わることによって、見る人の経験とか好みとか知的レベルとか、そういったものに依じてぜんぜん空間が違って見えるというか、ダブって見えるというか、いろいろな形に見えてくるのです。そこが人間の文化にとって大事なのかなという気が私はしています。

馬場氏 環境と建築の問題はこれから一番、大切である。それにネットワーク、あるいは緑も加わるというようなことがあると思います。考えてみると昔は建築と美術とか工芸というのは結婚していたと思うのです。ところが離婚してしまったわけです。それをもう一度、結婚させるというのではなくて、本当はむしろ愛人関係のほうが常に緊張感があって、しかも常にフレッシュで、どうも建築と美術とか工芸というのは結婚していたと思うのです。



aaca建築と文化を語る夕べ 「都市と人と自然との共生まちづくり —なんばパークス—」

開催日:2009年3月13日(金) 主催:(社)日本建築美術工芸協会
会場:大林組 東京本社 講堂 講師:大井 昇二氏((株)大林組)

なんばパークスの街づくりの背景にあるものと計画をどのように考え実践、実現したか、人と街の環境づくりについてお話をしたいと考えています。

・開発前の計画地大阪球場周辺は、スポーツ施設として、球場の他、スケート場、ボーリング場、卓球場等整備され、市民の人たちがエンターテインメントを楽しんだ場所でありました。エンターテインメントな文化を後世に継承していく強い使命を持った土地であろうと考えました。

・大阪は、非常に緑の少ない街というの言われ続けています。緑が環境保全に重要な要素であり人に優しく心に安らぎを与えてくれることは言わずもがなです。再開発地区全体が緑で覆われるような緑のかたまりがあったらとの願いが2つ目の考え方です。

施設では、この地区に住宅ができたことにより、24時間生活が感じられるようになり、またより自然が活用される場ができたと考えます。遊・職・住の街です。

■なんばパークスのまちづくり

高密度都市の開発の中にいかにして圧倒的なオープンスペースを見出すかということでした。800%の容積を十分使った形で開発をしようというのが事業者の意図です。その相反する2つのことをどのようにして解決するかということをチームで知恵を出し合いました。オープンスペースとして最初に屋上を利用する考え、地上から連続する屋上を考えました。



都市と自然と人との融合をはかれる大きなオープンスペース都心のオアシスが生まれました。

事業的観点から商業施設として一番重要なことは、集客力と、もう一つは何回も来てくれるというリピート性、この二つです。商業施設を訪れる人がいつも新鮮で、あるいは新しいことを発見できるような体験の場まちづくりの活性化の中の主役というのは建物じゃなく人だと思えます。だから、その人たちが使う場、環境が魅力的であれば何回も人が来てくれることにつながる。そういう経験の場をデザインすることにしました。

一つはパークスガーデン—これは先ほどから説明している屋上に広がる緑と広場です。二つ目は、キャニオンという形で峡谷をイメージした「街の南北を貫く歩行者空間」の大通りです。三つ目は8の字型の街の回遊動線です。

これは狙い通り市民の憩いの場となり、この地が持つエンターテインメントの文化の継承ができたのである。

■環境との共生—環境保全と事業性のバランス

- ・省エネルギー、ということで屋上緑化によるヒートアイランドの抑制。
- ・環境共生の切り口でお話しますと風土に合った樹種選定など、エコロジカルランドスケープデザインの実践です。風との共生。樹木を防風対策の為、効率よく配置する。最後に循環です。1日ここで使う雑用水量の約4分の1をこの循環水を利用しています。

屋上緑化の効果として土量の保水効果があります。

■事業性とのバランス

イニシャルコストとランニングコストが事業の重荷にならないかということでした。商業施設の目玉として屋上緑化が大きな集客効果になるでしょう、広場やガーデンを利用した附帯的な事業展開の可能性。

自然と都市を重層した新しい都市構造を持つ
自然と都市と人との融合共生したまちづくり
これが「なんばパークス」です。

TOPICS トピックス

澄川 喜一副会長 文化功労者



この度、社団法人日本建築美術工芸協会の澄川喜一副会長が平成20年度文化功労者となりました。

澄川喜一副会長は彫刻家として紫綬褒章をはじめ、数々の受章実績を持つとともに、日本芸術院会員ならびに東京藝術大学名誉教授などの要職にある。このような多年にわたる日本の芸術界の発展に貢献し、卓越した功績が認められたものです。

アピアランス

個人会員

片岡 葉子

Kataoka Yoko

略歴・活動

女子美術大学卒 新制作協会会員 JTC会員

1985～新制作協会出品

個展：1991、1998、2000、2003、2004、2005、2008

グループ展：多数

入選：JTC京都、MINIARTEXTIL COMO(イタリア)、
国際レースビエンナーレ(ベルギー)など受賞：MINIARTEXTIL COMO/MANTERO PRIZE
メッセージ真綿、紙、ピアノ線、籐、金網等を素材に、鳥、虫
の巣や卵、又、自然界の現象をテーマに作品制作を
しています。見た方がそれぞれのイメージを抱き、又、
記憶を呼びさましていただけたらと思っています。

連絡先

E-mail/os-yoko@ka2.so-net.ne.jp



香取 信三

Katori Shinzou

略歴・活動

1966 立教大学経済学部卒 (株)甲子看板工業所入所

1969 (株)甲子(旧甲子看板工業所)代表取締役社長就任

1995 (株)キノエインターナショナル代表取締役就任

同時にサイン工学研究所設立代表就任現在に至る

主な作品

1968 霞ヶ関ビルを始め超高層ビルサイン施工に従事

1970代 帝国ホテル・ニューオータニタワー施工に従事

同時に秋田・長崎大学、赤十字、国立等、病院サインを担当

1988 銀座七宝ビルサイン計画(屋外広告東京都知事賞)

1997 JR東海セントラルタワーズサイン計画担当

2000代 良質のタウンサインを掲出すべく努力中

メッセージ 兎角送り手だけの論理で掲出される事が一般的になってしまっているサ
イン計画の現状の中で受け手である利用者に役立つサインを送り出すべく奮闘してい
ます。

連絡先

E-mail/katori-kinoene@h3.dion.ne.jp



川原 昭

総務委員会委員 展覧会委員会委員

Kawahara Akira

略歴・活動

1995-2008 ボレアス展(札幌) 毎年出展14回

1997-2008 第1回アートパラダイス展(建築会館) 毎年出展13回

1998-2008 輪の輪工芸展(千葉県市川市) 毎年出展11回

1999-2008 市川美術展(千葉県市川市) 毎年出展10回

奨励賞 会員奨励賞 市川美術会賞 市長賞(2回)

メッセージ

アートパラダイス展(aaca主催)に、毎年出展しております。建築とアートの融合を、
年ごとにテーマを決め、数人のアーティストとコラボレーションしています。作品のテ
ーマは人間の内側から溢れ出るエネルギーを表現し、古代から現代、また未来へと続
く人々の営みの中にある、憧れ、喜び、を作品に託しています。

連絡先

ホームページ/http://www.aandm8.co.jp

E-mail/entasis@road.ocn.ne.jp



佐藤 静子

Sato Shizuko

略歴・活動

1947 福島生まれ 福島文化服装学院卒 オートクチュールを経て渡仏、帰国後寝具メーカー勤務。退職後タペストリー制作、桜染を始める。数年前からは子ども達との共同制作に取り組む。

さくらの会・桜学会・新青春の会会員 aaca卯月展メンバー

メッセージ

山深い自然の中に育った天文学少女が、一転して布の世界に迷い込みタペストリー制作を始めた。西行の桜と志村ふくみの草木染に出会い、色への思いはますます募る。aacaで作品を発表するという幸運にも恵まれ、新しい角度から自分を見ることになった。日本の色は美しい。生活の中にもっと取り入れたいと思う。

連絡先

E-mail/sakura.sato@hb.tp1.jp



priere

高部 多恵子

Takabe Taeko

略歴・活動

・女子美術大学芸術学部デザイン科卒 日本版画協会会員
 ・平成8年文化庁特別派遣芸術家在外研修員としてニューヨーク留学
 ・壁画一つくばエクスプレス秋葉原駅、ヒルトン小田原、目黒雅叙園、伊勢佐木市民病院、他多数

・版画一版画展にて新人賞及び奨励賞、カンヌ国際芸術展奨励賞、連展銀賞、コートダジュール国際美術大賞市長奨励賞、アイルランド国際版画展TIE賞1位、他賞多数、個展NY他 104回

・所蔵-英国・大英博物館、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州立美術館、横浜市民ギャラリー、ロスアンゼルス・カウンティ美術館、ギリシャ国立博物館、国立国際美術館、米国議会図書館、他多数

・デザイナー表紙、講談社「群像」他多数、パッケージ、ロゴ、マーク 他制作担当

メッセージ

女子美術大学を卒業して、その時学んだデザインを生かし版画をはじめて早46年になりました。[心のおもむくまま宇宙]をテーマとし、その間壁画・本表紙などの仕事も手掛けてまいりました。今回は版画作品(写真)を発表させていただきます。

連絡先 E-mail/t_takabe@msn.com TEL/045-901-2009

游星'21-1



中島 三枝子

調査研究委員会委員 フォーラム委員会委員

Nakajima Mieko

略歴・活動

1987 有限会社ぎやらりえ・るたん設立

1988 aaca入会(調査研究委員)現在に至る

1996 恵比寿に「画廊るたん」開設

2000 銀座に「画廊るたん」移設

2010 銀座開設10周年企画展を予定

メッセージ 画廊を営む傍ら、協会を通じアートと社会の関わりを模索しています。尚、aaca会員の皆様の画廊使用につき、特に便宜を図っております。会員の皆様の展示発表をお待ちしております。

2009年度aaca会員展覧会予定

6/22(月)~27(土)「寄神宗美展」

7/27(月)~8/1(土)「AACA3人展」

連絡先

画廊るたん TEL&FAX 03-3541-0522

〒104-0061 中央区銀座6-13-7 新保ビル2F

E-mail/le-temps@pm.highway.ne.jp

相鉄フレッサイン鎌倉大船 アートワーク



画廊るたん

はやし まりこ

Hayashi Mariko

主な個展 等 2000年より作家活動スタート ●2000/ITOKIショールーム 初の個展 ●2001/村松画廊 ●2002/ギャラリー彩園子 ●2003/バリ サロン・ド・ドートンヌ 出展以来5年連続入選 ●2004/バリ アトリエヴィスコンティ 六本木ヒルズ ハートランド、この年より毎年の展覧会がスタート ●2006 上海J・ギャラリー ●2007/村松画廊 ●2008/le bain ギャラリー・リラインスショールーム ハートランドと同時開催

アートワーク ●2005 コンラッド東京エレベーターホール、客室 ●2006 四日市都ホテル3F宴会場 ホテルオークラ東京さざんか ●2007 JALサクララウンジ(成田) 新宿タカシマヤ1F天井画 ●2008 ホテルオークラ福岡客室 博多織アート 伝統工芸士 古賀勝幸氏と東京ベイコート倶楽部スパエリア、イタリアンレストラン

●2009 エクシブ山中湖

メッセージ 空間の中における絵画の存在は優美さ 力強さ 現代性などを引き出すものとして大きな役割が有ります。もちろん究極はその空間にたたく「人」が主役ですがその人となりを表す強力な意味があるということは否めません。空間とアートを考えるものとして独自の世界観を作り出し、より深い世界にしていくために努力を惜しまないでいきたいと思ひます。

連絡先 E-mail /info@marikohayashi.net http://www.marikohayashi.net



株式会社メック・デザイン・インターナショナル

創 立 1972年3月10日

事業内容

■インテリアの設計・監理、施工 ■設備の設計・監理

■FF&Eの設計・製作・販売

■サイン、アート、ランドスケープ等のデザイン・製作

■コンサルティング (PM・FM・CM・PA・MEP)

■住宅インテリア用品の販売 ■カラースキーム・モデルルームデザイン

■マンションリフォーム工事 ■不動産の仲介 ■人材派遣事業

メッセージ 「デザイン&プロダクション」を基本姿勢に、設計、コンサルティングから施工まで、一貫したサービスを提供し続けています。オフィス、ホスピタリティ空間から住宅などのインテリアデザインを通じて、お客様のニーズにお応えすると共に、真に価値ある社会実現に貢献してまいります。

連絡先

住所/東京都港区芝1丁目10番11号コスモ金杉橋ビル

TEL/03-6400-9000

URL/http://www.mecdesign.co.jp

E-mail/BP@mecdesign.co.jp



mec design international





GROUND DESIGNER

 鹿島
KAJIMA CORPORATION

汐留シオサイト

人と自然そして建設が共にある未来へ。グランドデザイナー、カジマ。

<http://www.kajima.co.jp/>

想像力会議

TM

三菱地所(株)取締役社長
木村 憲司

三菱地所ホーム(株)
小林 剛

(株)三菱地所設計
新田 佳代

三菱地所ビルマネジメント(株)
月岡 早苗

三菱地所幕和社区(株)
山崎 一乘

三菱地所アジア社
藤部 晋

三菱地所リアルエステートサービス(株)
中井 晋

(株)ロイヤルパーク汐留タワー
藤屋 芽生

木村「みなさんどうも、今日もよろしく。さて今日の『想像力会議』は、ちよつと想像すれば見えてくるような未来じゃなく、思い切つて気が遠くなるような、夢のような未来を想像してみようと思います」

新田「おお、でも難しいお題ですね、どう手をつけたらよいのやら」

木村「すつとんきような想像でもかまいませんから、遠慮せずに誰からでも」

小林「では、真面目な話、僕はいずれ空中都市を実現したいと思うんです」

藤部「いきなり来ましたね(笑)」

小林「いや、建物を建てるとなると、僕らが先ず考えるのは、この地面には何を建てるか、じゃないですか。でも、本来僕らの仕事ってというのは理想的な空間を提供するということであつて、地面に縛られる必要はないはずでしょ」

山崎「なるほどね」

小林「空中都市は今まで数々の小説や映画の舞台になつてきた人類の夢の象徴だし、絶対につくられるべき、それを、いつか誰かが作るでしょ、じゃいけないと思ふんですよね、せつかくこの仕事してるのに」

月岡「つくることの第一歩つて、まず、つくれると信じてることだもんね」

小林「そうそう、まずは信じてることから始めないと」

(10分経過)

新田「ビルが木と同じ働きをしたりするといつてよね、光合成とかするの、ビルが月岡、環境をよくするビルは、実現したいね、できそうじゃないか」

藤部「エネルギーを自分でつくりだしたらやうオフィスビルとか、自給自足ビル」

中井「なんか、いつのまにか生まれるエネルギーだといつてすよね、たとえ今は活用してないけど、人が働いたら、立んたりしてあるエネルギーをリサイクルすることつて、できないのかな」

山崎「仕事中の雑談とか笑い声までエネルギーに変換しちゃう、みたいな」

藤部「このビルの電力は雑談エネルギーを利用しています、とかね(笑)」

木村「あんまり雑談ばかりされても困つちゃうんだよね(笑)」

(50分経過)

中井「無重力の街つて、うのはつくれないですかね」

山崎「できそうや、でもかプセルの中なら無重力にはできませんし」

藤部「空を飛ぶ道員とか無くてもいいんです、誰でも飛べるんだ」

月岡「でも無重力だと、飛びたくない人も飛んじやないか」

中井「飛びたくない人は、その街に行かないんじゃないですかね(笑)」

月岡「なんなのよ、その街(笑)」

(75分経過)

小林「だからさ、翻訳システムを前に丸ごと埋め込んで、リアルタイムで、言葉の障壁が無い街つてのをつくりたいの、これは日本が変わるよ」

藤部「日本にいながらにして世界が広がりますよね、今よりすつとね」

新田「みんな語学勉強しなくなりませんか」

藤部「いや、あくまでもそれは補助的なものになるから語学は必要なんじゃないか」

新田「えー」

月岡「えー、とか言わない(笑)」

木村「あのさ、盛り上がりつてるところ非常に申し上げにくいんだけど、小林「は、はい」」

木村「夜も更けてきたので今日のところはそろそろお開きに……」

全員「えー(笑)」

木村「いやいや、明日もこの動きをやりましょう、とにかく、街を歩いて人が元気で、笑顔で、そういう街を想像し続けましょう、今日はみなさんお疲れさまでした」

全員「お疲れさまでした」

人を、想う力。
街を、想う力。

三菱地所グループ

人を、想う力。
街を、想う力。

記念事業 協賛会員 ご芳名

(敬称略)

個人会員ご芳名

今里 隆 片岡 葉子 川原 昭 高部 多恵子 中島 三枝子 はやし まりこ
 小原 輝子 香取 信三 佐藤 静子 田河 宣行 永野 久美子

法人会員ご芳名

株式会社 アートフロントギャラリー 清水建設株式会社 株式会社
 鹿島建設株式会社 三菱地所株式会社 メック・デザイン・インターナショナル
 株式会社 環境デザイン研究所 株式会社 三菱地所設計

新入会員・会員の移動・その他

個人会員

(2008年9月～2009年3月 入会・敬称略)

岩井光男	〒100-0005	東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル	☎03-3287-6552	(株)三菱地所設計
岩田章吾	〒530-6591	大阪府大阪市北区中之島3-6-32 ダイビル129	☎06-6449-6993	岩田章吾建築設計事務所
山口 誠	〒106-0047	東京都港区南麻布2-8-17 鳥海ビル1F	☎03-6436-0371	(株)山口誠デザイン
寺嶋一希	〒411-0905	静岡県駿東郡清水町長沢1157	☎055-975-7050	(株)木村鋳造所
加藤雅康	〒164-0003	東京都中野区東中野3-13-10 BALCON101	☎03-5386-6101	カトウアーキテクトオフィス
小川広次	〒182-0022	東京都調布市国領町1-7-7	☎042-482-3027	(株)小川広次建築設計事務所
竹中健次	〒920-0981	石川県金沢市片町2-1-1 ハオカビル4F	☎076-261-7022	一級建築士事務所 竹中建築計画工房
長田龍侍	〒195-0072	東京都町田市金井8-25-53	☎042-735-8014	長田龍侍設計工房
前田慶史	〒145-0065	東京都大田区東雪谷2-22-18-507	☎03-3728-2526	前田慶史アトリエ 一級建築士事務所
中村仁美	〒694-0305	鳥根県大田市大森町ハ132	☎0854-89-0062	中村ブレイス(株)
古城 眞	〒812-0017	福岡県福岡市博多区美野島1-16-20-301	☎092-474-6632	都市環境デザイン研究所
塩野麻里	〒198-8655	東京都青梅市長淵2-590	☎0428-25-5111	明星大学造形芸術学部
吉野ヨシ子	〒275-0016	千葉県習志野市津田沼6-4-2	☎047-453-2066	

法人会員

(株)タウンアート	代表取締役 柳沼正典	担当/富樫和由	
	〒101-0062 千代田区神田駿河台1-2-1 B1		☎03-5280-5741
(有)アースケイブ	代表取締役 団塚栄喜	担当/同左	
	〒150-0013 渋谷区恵比寿2-14-6		☎03-6277-3970

社名変更

(新) 保土谷バンデックス建材株式会社 ← (旧) 保土谷建材工業株式会社

OACA理念

建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな芸術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与する。

発行 社団法人 日本建築美術工芸協会
 〒108-0014
 東京都港区芝 5-26-20 建築会館6階
 Tel 03-3457-7998
 Fax 03-3457-1598
 Url <http://www.aacajp.com>
 E-mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
 長谷川 亨 石田 眞人 北村 孝昭
 瀬川 秀之 竹生田 正 中村 弘子
 野口 眞理 本田 宣之 山崎 輝子
 事務局

印刷 美和野印刷株式会社